「話すこと」の習熟

Some Suggestions for a Better Oral Presentation

吉 本 瑞 應*

奈良県立医科大学附属図書館

はじめに

「なぜ」という強い疑問をもち、「研究」を日常化することから、「研究する態度・姿勢」が身についてくる。そうした生活実践の中から、よい「研究成果」が生まれる。さらに、その成果を活字として、あるいは、大ぜいの人前で「発表」する。常にみずからを、みずからの手で高めていくほかに、医学図書館員人材の育成は望み得ないという私自身の信念のもとに提言し、実施したのが今日の「研究集会」、「セミナー」である。

第7回という、私にとってひとつの意味を持つセミナーを担当することになり、その成長、成果を自分でたしかめなければならない立場におかれたことが、この二日間、私を終始参加者とともに釘付けにさせた。会場は活気に満ち、内容的にも充実した、実り多い、大きな成果を得たことは、何よりもよろこばしいことである。

しかし、口頭で「発表する技術」は率直に言って、お粗末である。切角の立派な研究内容も、話すことの術・演出の効果如何で、随分違ってくるのではないだろうか。今後のセミナーを、さらに秀れたものにさせる契機ともなればと筆をとることにした。

利用者の中には、何となく虫の好かない顔、態度が気に入らないと思う人があるものであるが、同様に、好かれていない、嫌がられている館員も必ずいるものである。

利用者の要求するキーポイントを把握できなかったり、図書館専門用語を使い過ぎたり、冷たい言葉使いや、

俗っぽい表現を使ったり、高姿勢な態度などとうるものな^らて^っき^りである。

利用者との言葉のやりとりは、図書館員にとって大きい意味を持つ。図書館の印象・評価、信頼・親和感、すべて、このコミュニケーション スキールにかかっているということをよく心得ておかねばならない。それは、丁度医師が患者との問診でおこなうのと、同じ重要性をもつものである。

話し方、聞き方、質問の仕方、答え方、傾聴的態度、ゼスチャー、タイミング、テンポなどは、当然身につけていなければならない、一つの専門的技術であると思う。

私の受けてきた教育をふり返ってみても、読み書きに偏し、今日ほど「話すこと」を重視されていなかった。外国語の学習では、口の開き方、舌の動かし方、アクセント、イントネーションのつけ方から、話し方に至るまで、一応教わる過程を通った。しかし、こと国語に関しては、全くそれらの訓練はなく、自分の考えや、自分の主張を「話す」ことの指導も、また、人の話しをいかにして「聞く」ということの教育も、なかったことが不思議に思うくらいである。

寺に生まれ育った私には、小さい頃から、巧妙な話芸に魅了されたことも少なくなかったが、これらは、すべて家庭や環境から学んだ貴重な体験であったろうか。

人前で話す勇氣の点では、また、どちらかと言えば、形式ばらない「討議」の場での話し合いは、第1回医学図書館員セミナーの頃とでは、問題にならないほど目立った上達がみられる。しかし、大ぜいを相手に、あらたまの発表となると「へたくそ」と言わざるをえない。発表技術を身につけるための積極的な工夫が望まれ

*Zuio YOSHIMOTO: Nara Medical University Library, 840, Shijo-cho, kashihara City, Nara 634, Japan.

(昭和55年11月1日 受理)

ることを強調したい。

限られた時間内に、自分の研究成果をどうまとめて話すか、どの部分を特に強調するか、結論は、また演出効果をも、あらかじめ考えた周到な準備と基礎的な訓練が何よりも必要である。ただ、用意した原稿を早口で読みあげるのに終始している。あの調子なら、たとえ場数を踏んだとしても、よい結果が生まれることを期待することもむずかしいと思われる。

発表時間1人「15分」(厳守)は、実施要領にも示し、本人にも通知して、よくよく了解されている筈である。にもかかわらず、時間内に収められる人は少なく、5分前の鈴で、あわてふためき、1分前の知らせで血相を変え、猛スピードで残りの原稿にしがみつきの読み、持ち時間なしでストップさせられる。なかには、司会者のストップにも動じることなく読み続けようとする人もある。

研究発表では、参加者一人一人に、自分の研究成果の内容を正確に伝え、理解してもらうことが主である。印刷論文と違って、話すのは一回限りである。しかも、言葉は瞬間的に消えてゆく。それでも、聞き手は聞き返すことさえできない。したがって、話しぶりも耳で聞いて、やさしい、わかりやすい話し言葉で、比較的短いセンテンスで話さなければならない。同じ語句を繰り返したり、別の言葉で言いかえたりすることも当然必要になってくるのもこのためである。

話す速さは、普通の会話で話す時よりもゆっくりめに話し、私の経験から、平均1分間200字程度だろう。内容にもよるが、よく研究して原稿の量をきめることが何よりも大切である。

原稿の内容を決める場合に、研究成果をどのようにまとめるか。また、それをどんな順序で出すか、時間の割り振りをも考えて、あらかじめよく練っておかねばならない。発表の言い出し方にも工夫したいものである。まず、発表する動機、理由を話し、これから自分の発表する内容がどのような意味があるかについて、はっきり話すことが参加者をひきつけるコツである。また、現在までのこのテーマに関しての研究を簡単に紹介することも言い落してはならない。続いて、特に主張したいことを

客観的に強調し、しかも、それが正しい調査結果などにもとづいていること。また、自分とは反対の考えや意見が適当でないことを、色んな角度から批判することを忘れないで、結論へと導くことが大切である。話しの終りには、自分の考え・主張の要点をはっきり繰り返し、決められた時間内にきちんと結びたいものである。

今回、発表の持ち時間は正味15分で、セミナー当日になっても変更しなかったが、色んな都合でとっさに変えられることも起り得る。だから、原稿の量もあらかじめ規定時間の分のほかに、その時の事情により慌てず延したり、縮めたり、臨機応変の処置がとっさにとれるような工夫を原稿に示しておくことが大切で、特に残り時間一分の量は別に用意する位の周到さで、一にも二にもふだんの準備が大切である。

原稿なしで、ほんの個条書き程度のメモを参考に、自由自在に発表している人を見ると、何となくゆとりが感じられ、聞く側にとっても、楽に聞けるものではあるが、持ち時間を正確に使い、内容を言い落すことなく伝えるためには、しっかりした原稿を用意した方が賢明である。

原稿を見ると言っても、片時も目を離すことなく、指で行を追いながら発表しているのは、見苦しい。時には、一人一人に話しかけるようにして、参加者を見渡すくらいの余裕がほしいものである。参加者の同意を求めるのも注意を集中させるコツである。

発表の途中で、気まずさや、間もちに、咳ばらいをしたり、意味のない「アー」、「エー」などは、聞き苦しいもので慎むようにしたいものである。

とくに、大ぜいの前で話す時は、言葉の終りが不明瞭になり、聞きとりにくくなるものであるが注意したい。かと言って、最近の語尾を意識的に強く言い過ぎる風習も、耳障りでいただけないものである。

実行委員を忙しくさせたのは、スピーカーのボリュームの調整である。ふだんの普通の声で、自然な調子を崩さないよう、どちらかと言えば、低めの声で話せばよいものを、怒鳴りに近い声で、なかには、呼吸音まで聞えてくる人もある。また、逆に囁くように話し、聴衆の眠気をいやがうえにも誘うのも迷惑ななしである。スピーカーから流れる自分の声を確かめながら、マイクrofónの感度を、マイクrofónとの距離、向きを自分で調整するゆとりがほしいものである。

動作、身振りや表情も、きびきびしているのは、何となく気持ちがよいものである。何よりも、生き生きとした活気が感じられ、しかも物柔らかな物腰は好感がもてる。それも、自分の話す内容について、これは自分でなければ話せないという、静かな自信がその根底になければならない。平素から人の話しぶりをよく観察して、勉強をする習慣をつけておくことも大切である。

まったく本人は気がつかないものであるが、人には色々な癖がある。頭をかいいたり、話しながら貧乏ゆすりをしたり、手をポケットに入れたまま話したり、といった具合である。注意しなければならないことだと思う。

プログラムの作成に当っては、聞く側の注意をそらさせないためにも、少なくとも1時間半を越えないところで、休憩をとるよう配慮したが、聞き手の注意をそんなに長く集中させ続けることは非常にむずかしい。したがって、「間」のとり方を工夫し、参加者に考える時間を持たせたり、印象を強めたりすることも必要である。力を入れて話すところと、そうでないところと区別したり、言葉に抑揚をつけ、単調にならないよう細心の心遣いも大切である。引用、逸話、比喩、気のきいたウィット、ユーモアなどで、上品な小さい笑い、眠気を吹き飛ばす大きい笑いを誘うものを、適当なところへ、適当に用意することによって、聞き手の疲労を和らげ、注意を集中させることに役立つものである。このように平素から素材を蓄えておかねばならない。出る早々、発表の前置きに弁解がましく笑わせる人がいるが、その効果は少なく、持ち時間を減少させるのがオチである。

まず、原稿が仕上がったら、一語一語はっきり発音する

ところから、何回も、何回も繰り返し、繰り返し、話す練習をすることである。これを怠ってはならない。テープ・レコーダーに吹き込んで稽古をする。聞きながら、訂正を加え、より完全なものにしていく。自分だけではなしに、他の人にも聞いてもらい、繰り返し練習をすることである。

今回、O.H.P.を利用した発表者がいたが、スライドを使う人はなかった。これら視聴覚用具もどんどん利用して、直接目に訴え、演出効果を高めることにより、一層よい結果が生まれる場合もある。これら資料は、見やすくすることが最大の条件であることは言うまでもないが、説明の仕方にも、細心の注意を払わねば効果は薄れるであろう。

お わ り に

「話すこと」をいつも苦手としている私の素人談義に過ぎないが、日頃より痛切に感じていることを率直に述べ、医学図書館員セミナーの提唱者としての杞憂として受けとめていただき、この拙文が、さいわいに、今後セミナーの場で、また、ひろく日々の仕事の中で、少しでも生かされれば、私の大きな喜びとするものである。

参 考 文 献

第18回日本医学会総会編 わかりやすい学会発表
東京 南江堂 昭50